

## コミュニカティヴ・アプローチの旅

鈴木昭一\*

はじめに

1999年の夏私は1カ月余をイギリスで過ごした。初めてイギリスを訪ねた目的はいくつかある。その一つは、いわゆるコミュニカティヴ・アプローチをイギリスという現地で試してみることであった。更には、今まで本や新聞、テレビなどで見聞きしてきた知識をこの目で確かめる意味もあった。もう一つは、大学時代に教えを受けた恩師をイギリスに訪ね、長い間のご無沙汰を詫言いつつ、お互いの現状を確認したいというねらいもあった。

### I. コミュニカティヴであるために

「コミュニカティヴ・アプローチの旅」を語るには、言葉を使わなかった体験から入ろう。

#### 1. 言葉はいらない

1) まず最初はLondon到着早々のことである。HeathrowからPaddington駅に着いた私は、まずコーヒーを1杯飲んで落ち着くことにした。Londonに入ったことを心で確かめながら、日本を出発する直前の慌ただしさと、今こうしてくつろいでいる自分との落差に思いをいたしていた。すると、私の前の席に中年の夫婦がやって来て、にっこり微笑んで座った。私も笑顔で応えた。2人は、家路に向かう前にちょっと一休みという感じであった。私は何も話しかけなかった。心の中を駆け巡るあれやこれやに思いをいたしながら、

黙っていた。彼らも私に何も話しかけてこなかった。私の方が先に席を立った。2人からももらった笑顔の挨拶を、今度は私の方からお返しした。

2) Londonに到着して何日目かにBloomsbury界隈の“The Literary Pub Walk”に参加した。夕方7時から2時間程歩いた後である。車の通らない小路の路上で、仲間といっしょに食事をしている中年の1人と、たまたま目が合った。私はWalkを楽しんでいたが、彼はまだ明るい夏の夜の夕食を楽しんでいるところだった。お互いにいい晩だね、と言いたかったのかもしれない。気持のいい会釈だった。気がつくと、私のホテルの前の小路だったが、彼がどこの、どういう人かはどうでもいいことであった。

3) Constable Countryを歩いたときも、言葉はいらなかった。バスの運転手に教えてもらった田舎道を歩いていると、身も心も洗われる思いで、今どこにいるのかという意識さえなくしていた。いつ見ても汚く茶色に濁っているLondonのThames川とは違って、Stour川はきれいに澄んだ水を満々とたたえ、ゆったりと流れていた。Fen橋を渡り、静かに草を食んでいる牛の群れのそばを、川沿いに歩いてFratford橋に出た。ここはConstableが何枚もの風景画を描いた、まさにその場所。一軒だけの食堂で求めた魚のフライとゆでたジャガイモの昼食を、私はスズメたちといっしょに食べた。橋の上をアヒルが歩き、たくさんのカモが水辺を泳いでいる、そういう自然の中にひと時身を置いた。何も言葉のいらぬ世界であった。

4) Lake DistrictのGrasmereに着いた私は、

\*〒380-8525 長野市三輪8-49-7 長野県短期大学  
\*Nagano Prefectural College, 8-49-7 Miwa,  
Nagano 380-8525, Japan.

早速散歩に出た。少し歩くと、もう牧草地である。牛の姿も羊の姿も見当たらないので、柵を開けて中に入った。草の上に座って Grasmere 湖を見下ろしていると、湖の向こう側から羊の声がしてきた。その声に応えるように、別の方角からメーエという声が聞こえてくる。それに呼応してメーエと続く。そういう羊の声がまるで天から降ってくるようであった。1匹の羊の鳴き声が夕方の雲に反響し、湖面に届いてまた反響しているような錯覚を覚えた。そんな羊の鳴き声に聞き惚れていると、別の方角から子どもたちの遊び声がしてきた。その声もやはり天から降ってくる響きであった。

5) 言葉のない世界といえ、もう一つ『嵐が丘』の舞台を歩いた時のことがある。夕方5時から Brontë の橋まで歩くことにした。Penistone Hill はなだらかな丘で、咲き乱れるヒースの花に誘われて、歩を進めた。そこには群生したヒースと平板な岩が何枚も重なった風景が広がっていた。かすかに小雨が降っていて、風も吹いている。その風の音に交じって、ピシッ、ピシッという音がする。そのうちにヒュー、ヒューという音もしてくる。どうやら群生するヒースに溜まった雨水が風に吹かれて生ずる、自然の音楽だと気づいた。雨模様で陰惨なこの風景は、まさに『嵐が丘』の舞台そのものだった。

そんな感慨にふけた後、ふと気がつく私のまわりには誰もいなかった。それでも目指す橋まで行ってみることにした。車の入れない道だという農道で、5人の家族連れに会った。橋まで30分以上はかかるという。平坦な道は速足で歩いたが、段々上流に近づくとつれ、小道は下りになる。小さな橋が目に入った時、ついに到着したという思いよりも、さっき5人の家族に会って以来、人の姿を全然見かけていないことの方が気になった。ここで足でもくじいたらどうなることか、という不安が急に襲ってきた。羊が何匹か帰り道の先方

にいた。大人しくて牧草地の方へ移動してくれたが、それでもうしろからどんと背中でも押されるのではないかと心配であった。6時半に橋の袂を出て、宿に戻ったのは8時だった。まだ明るかったとはいえ、夕方の5時から知らない山中を歩くのは全く無謀であった。以上は「言葉のいらぬ世界」の体験である。

## 2. 一言が大切

滞在中によく耳にした言葉が5つある。“Thank you,” “Sorry,” “Excuse me,” “No problem” と “OK” がそれである。

1) “Thank you.” の言い方には色々あって、これは日本語で「ありがとう」と言ったり、言われたりする時の状況を考えれば大体想像がつく。何か買い物をして “Thank you.” と言われるし、一歩道を譲っても “Thank you.” である。私の耳には “Thanki.” としか聞こえない “Thank you.” もあったし、“Thank you very much.” とていねいに言われたこともある。丁寧であれ、軽いお礼の意であれ、一番よく耳にし、私もよく口にした言葉である。人と人が何らかの接触をして、口にすべき大切な言葉だ、ということをしみじみと実感した。

2) “Thank you.” に続いてよく耳にした言葉は “Sorry.” である。最も印象的だったのは、成田を出発した飛行機の中である。乗客にあらかじめメニューは配られていたが、早くもチキンが出払ってしまったのだろう。女性の乗務員が “No more chickens. Sorry!” と言ったときの口調には気持がこもっていた。わずかでも人に迷惑をかけたり、邪魔をしたりするときに口にすべき言葉である。

3) 同じ London でも、最初のころ泊まっていた Bloomsbury 界隈では “Sorry.” を耳にすることが多かった。ところが Waterloo の駅近くのホテルに移ってからは、“Sorry.” よりも “Excuse

me.”を耳にすることが多くなった。どういふ違いがあるのか、不思議だったが、“Excuse me.”の方が“Sorry.”よりお詫びの表現としては軽い、と言えるのか。Dover 海峡を潜ってユーロスターが開通してからというもの、ヨーロッパからの観光客が Waterloo に多く滞在するようになった、と言われている。そのせいかどうかは分からないが、朝晩の挨拶も比較的少なかった。いずれにしろ“Sorry.”も“Excuse me.”も日常生活には欠かせない言葉であることに変わりはない。

4) ちょっとしたお願い事をしたときに、よく耳にした言葉は“No problem.”である。日本語の「どういたしまして」「構いません」に当たると思われるが、不思議と“You are welcome.”と言われることは少なかった。私の個人的な好みからすれば“No problem.”という言い方にはなじめないが、よく耳にしたことは確かである。ただし、タクシーの運転手に“No problem.”と言われたときには警戒するに限る。“No problem.”の裏側にタクシー料金がからんでいるから。

5) 最後に“Ok”に言及しておこう。“Ok?”は何か説明してくれた後で、必ず付け加えられる。こちらとしては100%理解できた訳でもないのに、早口の説明とその勢いに圧倒されて、つい“Yes”と言ってしまふこともあった。日本人的なあいまいさのせいかと思いつつも、事と次第によっては、大体分かれば充分な場合が多かった。

### 3. 聞き取りの力

みんな早口で英語をまくしたてるから、ちょっとした単語でも聞き取るのは大変だ。いっぺんに全部は聞き取れないから、ごく初歩的な段階を整理しておこう。

1) アルファベットのaが[アイ]と発音される場合が多かったのには驚いた。Tower Bridge の上の満月を見たくて、タクシーを走らせた後、明日結婚するから私たちを写してくれ、

と言った若者は“Enjoy your style!”と言い残して去って行った。洒落たことを言うものだと感心したが、“style”と受け止めたのは私の間違いで、本当は“stay”と言われたに違いない。

‘Guide Friday’ と称する市内の観光バスを待つ間に、切符売りの青年にこの種のバスは何台走っているのか質問したら、彼は“ID”だと言った。私には訳が分からなかったので“ID?”と聞き返したら、彼はにっこり笑って“eighty”だ、とていねいに言い換えた。

Todayが[トゥダイ]になるのは予想していたが、ladyが[ライディ]になることは、残念ながら、予測していなかった。

2) 初めて地下鉄に乗ったとき「マイン……」とアナウンスされているのだが、よく聞き取れない。何回か乗っているうちに、女性の声で“Mind the gap.”と言っていることが分かった。人によっては、mindとthe gapのあいだに間を入れるので、車両とプラットフォームのあいだのギャップよりも、英語のギャップの方が気になった。

3) ホテルの朝食のとき、アジア系のおばさんが“Continenta?”とお客に確認していたが、私には“continental”とは聞こえなかった。“Enjoy your meal!”は必ず言ってくれる言葉だったが、早口の人の場合には“Enjoy”が“Joy”に聞こえたりした。お客をテーブルに案内して“Do you?”とだけ言ったり、皿を下げに来て“Could I?”とだけ口にする人もいた。全文を言わずとも、相手に通じるせい、あるいはそれ以上の表現法を身につけていないか、のどちらかであろう。一度だけだったが、sirを[シャァー]と発音する黒人のボーイに出会った。

4) その他気付いたことを列挙しておく。Tower of Londonで同僚のかけた声に“Pa.”とだけ答えているのを耳にした。もちろんpardonの省略形である。Comeはよく[コム]に聞こえ

た。“Someone will come.”とか“Come back.”などの場合である。私の耳に boss と聞こえた単語が実は buss だったり、iron が聞き取れなくて、話がすぐには了解できないこともあった。Canterbury のホテルで夕食を終わったら、丁度 8 時の鐘が鳴り出した。私は bell のことを話題にしたのに、フロントの女の子は bill のことを気にしていた。

## II. 生きた言葉

言葉は生きている。生きているから、言葉によって何かが生まれる。うまく使えば人も生きるし、自分も光る。調子に乗ると、思わぬ痛手を被る。そんな思いを痛感した。Work という言葉に何回か出会うことがあったので、まずはそれを整理するところから始めよう。

### 1. Work に思いを込めて

1) 最も簡単な表現は “It works.” であった。Constable Country からの帰りのバスで、行きと同じ 2 人の男の子を連れた母親といっしょになった。まだ 2, 3 歳の下の子が一日の行程に退屈したのか、母親の腕の中でぐずっていた。眠くなったのかもしれないが、まだ家に帰れそうもなかった。そのとき、私はカバンの中にあめ玉があるのを思い出した。その親子に 3 つあげて、私も 1 つを口に入れた。さっきまでぐずっていた男の子が途端に静かになった。そのとき母親が口にした言葉は “It works.” だった。効き目があったのである。

2) その前の晩 Constable Country の様子を聞きたくて、Ipswich のホテルでボーイに質問を試してみた。しかし彼は Constable という画家がいたことさえ知らなかった。スコットランドの出身だという彼は、一言 “Work is work.” と言い切った。なるほど、と感心したくなる口調であった。それはそれで、気持ちのいい青年だった。

3) Stonehenge を訪ねるために、私は前の日に Salisbury 入りした。古い町なのに、なんとなく寂れていて、がさつな感じだった。私の泊まったホテルには「従業員募集」という張り紙がしてあって、今回の旅行中最悪のホテルだった。そんなこととは無関係に、若者たちはビリヤードをしていた。しばらくそれを眺めていると、思い通りにいかない友人を励まして、“You work here.” と言っているのが聞こえた。「今度はうまくゆくよ」という気持だったのだろう。

4) あと一つは Canterbury でのことである。夕方の 7 時過ぎ、気持ちのいいハーブの音色に引かれて、音のする方へ近づいて行った。そこへ奥さんらしき女性が子犬を連れてやって来ると、彼は演奏をやめて、小さなハーブを片付け始めた。5, 6 人の若者がそこを通りかかったと思ったら、中の 1 人が “Does your harp work?” と言ったのだ。「お前のハーブ鳴るのか」といった意味だから、ひどい侮辱だ。彼は黙ったまま片付けていたが、奥さんは一瞬悲しげな表情を見せた。しかし何一つ言葉では反応を示さなかった。人をからかうにしてもひどいことを言うものだ。こういう若者がイギリスにもいるのか、と私は悲しい思いがした。

### 2. オー、ミスイクまたはミスフォーチュン

1) London での最初の一夜を過ごし、朝食をすませて部屋に戻ろうとすると、まだ朝の 9 時だというのに、メイドが私の部屋のドアを開けようとしている。おかしい動きをするものだ、と一瞬警戒心をいだいて近づいた。幸い私の部屋は一番奥だったから、よかったのかもしれないが、彼女に言わせると、ロックしてなかったという。自動ロックではないらしく、再三確認していると “Push!” と言いながら、彼女はドアを引っ張った。Pull も push も彼女にとっては同義語で、動作が大事だったのだろう。そのことをきっかけに

して、持参した中学の英語教科書を読んでもらう約束をして、翌日ボーイと共に来てくれたが、彼女はついに読まなかった。もしかすると、彼女は文字が読めなかったかもしれない。

2) 少し現地の英語にも慣れ “You speak good English.” と言われて、調子に乗っていたところだ。Oxford の pub で “Is it too bitter?” と質問したのは、とんでもない失敗だった。 “A pint or half?” と聞かれて「しまった」と思った。 “Half.” と答えたものの、1人で “half” のグラスを2つ抱えて席に戻る恰好は、なんとも滑稽だったろうと思う。

3) Dr. Johnson の家を訪ねようと思って、タクシーに乗り “Johnson’s House” と伝えたら、運転手に Dr. Johnson と訂正された。彼は年配の運転手で、生粋のイギリス人らしかった。Dr. に力を入れた、その発音の仕方に Johnson 大博士<sup>1)</sup>への敬愛の念が感じられた。 “If a man is tired of London, he is tired of life.” とは Dr. Johnson の有名な言葉だが、City の真ん中に居を構え、毎日の生活を謳歌しながら『英語辞典』を編纂し、『英国詩人列伝』を書いた彼が、いかに London を愛していたか、またいかにイギリス人に尊敬されて続けている人物であるかがよく分かった。

4) Hampton Court Palace に連れて行ってもらった後、フランス料理を御馳走になったことである。マスターのスマートさといい、洗練された身のこなしといい、さすがと感心して、見ている。私たちのテーブルに来たとき、彼の言葉を一言、二言聞いて、その張りのある声にびっくりした。「まるで俳優のようだ」と私が言うと、「本当の俳優だ」と言う。しかし俳優としての仕事あまりこないで、レストランを経営している、ということだった。奥さんがテーブルに来たとき、彼の素晴らしさに触れた後 “One man’s misfortune is another man’s fortune.” と私は冗談を言った。すると「全くその通りだ。彼に仕事

が来なくて私は幸せだ」と彼女が言うので、みんなで大笑いした。その場に幸せな気分が拡がった。

### 3. おしゃべり

1) Hyde Park の Speakers’ Corner に行ってみた。小旗を掲げて、熱心に演説をしているが、聞いてくれる人が誰もいなかったり、2人だけで静かに話している光景もあった。そんな中に人だかりのしている所が一か所だけあった。白い帽子を被り、なにやら日焼けしたおばさんが、よく通る声でイギリスの民族問題やら宗教問題を論じていた。私はしばらくその場で聴き耳をたてた。

すると、演説の切れ目に聴衆から反論の声が上がった。最初はイタリア系の男性だった。その次にはスコットランドの男性が彼女に詰め寄って話した。そういう2人の掛け合いに、聴衆はどっと大笑いをしていた。そのうちにアメリカ人の女の子が進み出て、批判を始めた。挑戦する人々は熱心に挑むが、当のおばさんの方は、自分の言いたいことを言わせてもらおう、という態度であった。Speakers’ Corner では「おしゃべり」も堂々としたものである。

2) Ipswich の Christchurch Mansion に入ったら、入館した途端におばさんがべらべらしゃべっていた。私は、トイレの場所だけ確認して、勝手に館内を見て回った。折角の機会だから、退館する前にもう一度 Constable の絵とデスマスクを見ていると、受付にいた彼女が話しかけてきて、最後に宿はどこかと尋ねる。Great White Horse Hotel だと言うと、あそこは今まで経営者がよくなかったが、交替して Dickens との関係が大事にするようになってから良くなってきた、などと言いだした。一介の旅人をつかまえて、そんな町の噂話をしなくてもいいのに。しゃべるだけしゃべったら、他の人が入って来るからと言って、部屋を出て行った。来る人毎にこんな調子で対応しているのか、とにかくおしゃべりが好きらしい。

3) Dr. Johnson は「四大おしゃべり」<sup>2)</sup>の一人だったようだが、彼の住んでいた家を訪ねたときも閉口した。管理しているおぼさんの友人が訪ねて来たらしく、事細かな解説を相手の女性にしている。初めは聞くともなく聞いていたが、調子の高い声で Dr. Johnson を連発するのが我慢できなくなって、2人から離れた。幸い3階にビデオ紹介があったので、それを見ていると、ドイツの人たちが4、5人やって来て座った。そのうちの一人が、4階から聞こえてくる彼女の甲高い声に我慢できなくなって、静かにしてくれるよう頼みに行った。ほんの2、3分は静かだったが、たちまち元の調子に戻ってきた。私はさっきの彼と苦笑いをした。私の出会った「おしゃべり」は3人も女性であった。

#### 4. ヒューモアまたは婉曲表現

1) Tower of London の中心に White Tower が立っている。そこには武具が沢山陳列されていて、James I に贈呈された江戸時代初期の鎧兜<sup>3)</sup>もあった。その塔には歩き方が2つあって、ざっと見たい人のためには、短縮した順路が示されていた。SHORT ROUTE という文字が、方向を示す⇒(矢印)の上で逆さになっていた。文字よりも矢印の示す方向が大切ではあるが、これは面白いと思って、そばに立っていた係に「文字が逆さになっているのは“English humour”か」と質問してみた。彼はにっこり笑って“Yes”と答えたが、はたして彼が生粋のイギリス人であったかどうかは怪しい。

2) Stonehenge の見学を終わって、サンドイッチと飲み物の昼食を取ろうとした時である。ベンチに腰を下ろして前を見ると、次のように書かれたプレートが目に入った。

We apologise that these tables are on an uneven surface, but as this is a sensitive archaeological

area, the ground cannot be levelled.

(「テーブルが平らになっていなくて申し訳ない。ここは扱いに注意を要する考古学的地区だから、地面を水平に出来ないのです」の意)

ナショナル・トラストが管理する神聖な場所に、「平らでない」という意味の uneven を uneven と書くことのできる遊び心に感心した。見渡せば、テーブルは左右どちらかに傾斜していて、一つとして平らではなかった。

3) タクシーには禁煙の意味で“Thank you for not smoking”と書いてあるし、地下鉄の駅前では新聞立てに“Thank you for NOT reading our newspapers”と書いてある。芝生への立入禁止に“Keep off the grass”と書いた看板もあったが、これは絶対的な禁止であって、芝生を通らなくても歩ける場合には、“Please keep to the path”とか“Please keep to the Gravel Path”というような指示語が使われていた。

Cambridge で泊まった B&B では、共同のバスルームに“Please leave bathroom as you would wish to find it”(「元通りにしておいて下さい」の意)と書いてあった。The Wordsworth Hotel には“Please leave this Folder for the benefit of future guest”(「あとのお客さまのためにパンフレット類はそのままにしておいて下さい」つまり「抜き取らないで下さい」の意)というのもあった。今更言うまでもないだろうが、ストレートな言い方を避けた婉曲表現で、読み手の心に大きな期待を寄せている。いずれの場合も文末にピリオドはなかった。

4) ある時地下鉄に乗った途端、若い男性が私の顔を見てにっこり微笑んだ。おやとは思ったが、こちらも笑顔を返して彼の隣に座った。しばらくして、目の前に“I no naka no kawazutaikai wo shirazu”と書いた広告があるのに気がついた。

彼にどう発音するのかと尋ねられて、彼が私に微笑んだ意味は分かった。そこには“A frog in a well does not know the ocean”という英訳が添えてあった。語学学校の宣伝としては殺し文句を選んだものだ、と感心したが“kawazutaikai”（蛙大海）はひどすぎる。

5) Ipswich のホテルに入ったら“To be poor is unfortunate. To look poor is unforgivable. ‘SMART DRESS PLEASE’”（「貧乏であるのは不幸。貧乏に見えるのは許し難い。スマートな服装を、どうぞ」の意）これは面白いと思ってメモしたが、まわりにはいた若者たちはズックにジーパンという普段着で、ワイシャツをだらりと出した格好で談笑していた。翌日の朝食には、これから作業に行くという服装をした男性たちが、何人かやって来た。‘SMART DRESS’の人々が少ないことを嘆いた言葉だと分かってみると、一層面白かった。

### III. お金と食べ物

お金がなければこの世は生きてゆけない。食べ物、飲み物がなければ死んでしまう。ここでは人間の基本にかかわる2つのことに触れておこう。

#### 1. お金のこと

##### 1) 5 pence をめぐって

① Heathrow に到着して、列車に乗り換えようとしたとき、駅の真ん中に5 pence を見つけた。たかが5 p。されど5 p。10円足らずの小金といえども、お金はお金である。これを軽く扱うべきではないと思っている私は、近くにいた係の人に断った上で、その5 p を記念として大事にすることにした。

② Salisbury から Waterloo に戻る車中で、私はビールとつまみを買った。売り子の男性は、お釣りの5 p が今ないから後で届けると言ったが、お釣りは結構と答えておいた。予定通りプラット

フォームに下りたら、1人の婦人が近づいて来て、お釣りの5 p をもってこなかったが、それでいいのかという意味のことを言った。私がいい加減に扱われたと解釈したのか、売り子がごまかしたと解釈したのか、どっちにしても、さりげなく私のところを見ていてくれたと思うと、うれしくなった。

③ あるとき、駅のトイレに向かった。入るのに20p がある。階段を降りて行くと、私の前を歩いていた紳士が、ポケットから5 p を落としたようだった。ところが、それを捨てるどころか、蹴飛ばしたのには啞然とした。こんな端金という、その態度にはうんざりした。

④ Ipswich で町中から駅まで出ようと、バスに乗った。代金は45p だと言うので、50p を入れたが、お釣りが出てこない。なぜかなという顔をしていると、50p を入れてもお釣りは出ないシステムだ、と運転手に言われた。後の祭りである。

#### 2) お金の計算

① Cambridge で夕食を取ったときのことである。請求は£9.05 だったのに、私の出した£10 に対してお釣りが50p 2つで返ってきた。5 p は負けておく、ということであろう。チップを予想してのことだったかもしれないが、気持がよかった。

② Hawkshead から Windermere までタクシーを走らせたときも、料金は£15.10 という表示なのに、運転手は私の出した£20 紙幣に£5 紙幣のお釣りをくれた。タクシー代をまけてもらったのは、生まれて初めての経験だった。彼は口数の少ない親切な運転手だった。

③ Stratford-upon-Avon のホテルには、建物の古さと対照的にコンピューターが入っていた。あまり愉快的な思いをしなかったホテルだが、清算の段になったら電話代が入っていなかった。そう告げると、改めてコンピューターで打ち出してよこした。よく見ると、朝食で特別料金がある、と書

いてあった smoked salmon の代金が落ちていた。コンピューターからコンピューターに入力されているはずだが、担当者が注意を怠れば、思わぬ損失を出すことになる。フロントの彼女がにっこり笑って送り出してくれたのは、自分の至らなさへの苦笑いか、私への感謝の微笑みであったか。

④ こういう場面は他にもあった。別のホテルのことだが、朝食に English breakfast を食べたのに、チェックアウトになっても、その連絡がフロントまで届いていなかったこともある。ある店でタバコとフィルムを買ったとき、どう考えても安過ぎた。念押しをすると計算違いで、彼はその店に入ったばかりの従業員であった。

言われているほど計算がいい加減だとは思わなかったが、採用されたばかりでカードの処理方法がよく飲み込めず、手間取っているケースには何度か出会った。

## 2. 食べ物、飲み物のこと

1) イギリスの食生活がどんなものかを語るためには、実際の家庭に入ってみなければ何とも言えない。English breakfast にはソーセージ、ベーコン、焼きトマト、マッシュルーム、時にビーンと客の好みに合わせた卵がつく。ベーコンは、私には塩気が効き過ぎていたので、あまり食べなかった。湖水地方は山と湖の土地だけあって、そのマッシュルームはとてもおいしかった。

牛肉が特にうまいと思った記憶はない。むしろ羊や鳩、鹿の味の方が舌に残っている。どんな料理にも必ずジャガ芋はついていて、たいがい生野菜が添えてあった。私の家ではほとんど食べないカイワレも時々ついてた。

2) イギリス人のお茶好きは有名だが、外国からの旅行者が多かったせいか、ホテルでは紅茶を飲む人とコーヒーを飲む人がほぼ半々だったような気がする。駅などでコーヒーを注文すると、分量が多い。ハーフで頼んでも、日本で飲むコーヒ

ーより量が多い。紅茶もコーヒーも質より量という感じで、普通の店でこれはおいしいと思うことはあまりなかった。きっと有名な Savoy で御馳走になった traditional tea の風味が、いつまでも舌に残っていたためだと思う。

3) 夏のせいもあってか、ビールはうまかった。Buck's というドイツ製の lager は喉が乾いているときにはおいしかったが、たいがいイギリスの bitter を飲んだ。こくがあつてうまかった。イギリス人はよくビールを飲むのだろう。赤ら顔の守衛をその友人がからかって、「お昼に bitter を大分やったね」と言ったのに対して「1 pint やただけだ」と答えていた。聞くところによると、2 pints までは飲酒運転にならないそうである。値段は千差万別で、一番安いのは 1 pint が £1.50 だった。£2.01 という店もあったが、これは店のお愛嬌というところだろう。

4) 食事については、朝食をしっかり食べて、お昼はサンドイッチをカバンに入れておくことにした。昼食のために心を煩わすのは、時間の無駄だと思ったからである。ある晩 Thames 川沿いを歩いているうちに、空腹を我慢できなくなった。度々名前を聞いていた Oxo Tower Restaurant に入ることにした。30分待たなければだめだと言われたが、とにかく待った。その待ち時間の間に、まわりのお客の様子やメニューを見る余裕があったから、そこの雰囲気慣れてきたが、どこを見渡しても、カップルか数人のグループで来ている。1人で Oxo にいるのは私だけであった。ちゃんとしたレストランに1人で入る馬鹿はいないと思ったが、ワインもラムもおいしかったことは確かである。

## IV. たくさんの親切をもらって

旅の間中たくさんの人々からたくさんの親切をいただいた。小さな親切から大きな親切まで、数え上げればきりが無い。それとほんの少しの不親



切、ちょっと不愉快な思いをさせられたこともある。それらを整理しておこう。

### 1. 親切の数々

1) 旅に出て最初に受けた親切はいつまでも心に残る。日本からの飛行機は British Airways に乗ったが、なにかかもが初体験。物珍しさも手伝って、シベリア上空をのぞき込んだり、乗務員と話をしたりして時間を過ごした。スペインのバス地方出身だという彼は、飛行機が着陸するころ、ホテルで飲むのは高いから、これを飲んだらいいと言って、ウイスキーのミニボトルを12, 3個と缶ビール3本をそっと渡してくれた。こんなことがあっていいものか、とわが身を疑うほど感動的なイギリス入りであった。

2) Edinburgh を出て Haworth に到着するまでに受けた親切は忘れられない。Edinburgh 発10時の列車で York に着いたのは12時29分。Leeds に出る列車に乗り換えるとき、娘さんとお孫さんらしい女の子を連れておじいさんが階段を下りて来た。Leeds への行き方を尋ねると、彼は親切にも掲示板のところまで私を連れて行ってくれた。4分後に出る列車があった。私は、感謝して彼の指示に従った。York を12時37分に出て、Leeds で乗り換えた。

Keighly の駅に着いてからはお祭り中の無料バスでターミナルまで乗せてもらった。Haworth 行きのバスの中では、“Can I help you?” と、うしろの席から声をかけられた。そのおじいさんに教えてもらって、村の入り口で下車した。みんなのお陰で、3時前には予約しておいた B&B に入ることができた。Edinburgh の駅から5時間足らずで、私は Brontë 姉妹の村に到着していた。

Brontë Parsonage として保存されている牧師館は、想像していたより明るい雰囲気だった。その日の雨模様は Brontë の世界にふさわしい、という思いがしたので、係の女性とそんな話をし

から、ここには“nice people”がいると付け加えたら、すかさず“a nice visitor”という言葉が返ってきた。何とも親切な人々に恵まれた一日であった。

3) 今世紀最後と騒がれた日食を私は Oxford で見た。B&B を出て街の中心地に入ったのが11時少し前であった。ジーパンをはいた感じのいい黒人青年が、日食用の紙メガネで太陽を見ていた。早速彼に貸してもらって、私も太陽の欠けてゆく様子を見た。そのうち通行人が何人か立ち止まるとは、彼のメガネを楽しんでいった。段々とあたりが薄暗くなり、温度も下がってきた。太陽が元の状態に戻り始めたころ、10p で買ったというその紙メガネを“Keep it.”と言い残して、彼は去って行った。私は、日食とこの黒人青年の爽やかさの記念として、彼がおいていってくれたメガネを大事に取っておくことにした。

4) London を離れて、私が最初に訪ねた土地は詩人 Wordsworth を生んだ Lake District である。その日私は Grasmere に向かうべく Euston の駅に出た。駅の売店でスパゲッティとサラダを頼み、ビールが見当たらなかったので、白ワインの小瓶を買った。お金を払うとき、ビールはないのかと聞いたら Budweiser があると言って、栓を抜いてくれた。プラスチックのトレイにそれら4つをのせた。荷物は肩に一つ、左手にもう一つ。右手に食事用のトレイ。近くのテーブルに座ろうとしたのはよかったが、トレイをテーブルに置こうとした瞬間、ビールを床に落としてしまった。栓を抜いてあったからたちまち泡を吹き出した。もう荷物はそっちのけにして、あわててビール瓶を拾い上げた。とんだ失敗をしてしまった。

それを見ていた店員の一人が、すかさず新しいビールをもってきてくれた。自分の責任だから、お金を払おうとしたが、受け取ってもらえなかった。故意にしたことではない、と解釈したのだろうか。掃除係はすぐにモップで床をきれいにし

くれた。ようやく落ち着いたところで、私は昼食を取った。終わって席を立つと、中年の男性が、唯一知っている日本語だと言って「ありがとう。さよなら」と言葉をかけてくれた。思いがけぬ失態を演じたお陰で、思いがけぬ親切を受けることができた。

5) Lake District の山々の様子を知りたくて、私はバスツアーに参加した。所定の場所を確認するのに気をもんだが、予定の10時20分になってもバスが来ない。間違った場所に立っているのかなと徐々に不安を募らせていると、やっと小型のバスが姿を現した。ほっとしたあまり、ドアも閉めずに近くの座席に座った。運転手のうしろに座っていた男性がすかさずドアを閉めてくれた。Thank you very much.

私が乗るとすぐにトイレ休憩になった。このとき、ちゃんとバスに乗るまでは心配だったという話をした。バスに戻ると、運転手が話し出して、日本から来た2人の女の子がバスに乗りそびれて、翌日つきあったというような話をしていた。さらに続けて「私は punctual だった」と主張しだした。その他何やらしゃべっていたが、私はさんざん気を使って、その結果バスのドアを閉め忘れた自分を恥じていたので、運転手の話はあまりよく耳に入らなかった。

再度バスを降りたら、さっきドアを閉めてくれた男性が「私は時計を見ていたが、彼は punctual ではなかった」と話しかけてきた。London から来たという青年は「運転手の話は black humour だから気にするな」と言ってくれた。幸い私には話がよく聞き取れなかったので、何も気にするところはなかったが、彼ら2人が私をかばってくれたことはうれしかった。

昼食後 London からの青年は、出発時間になってもバスに戻って来なかった。5分位したころ、彼は缶コーヒーを片手に悠々とやって来た。遅刻の詫びなどしないで、座席に座った。彼は口にし

なかったが、私をかばって、わざわざバスに遅れることで運転手へのしっぺ返しをしてくれたのかもしれない。Black humour には black humour で答えたとすれば、なかなか粋なことをするものだったと思った。

## 2. 不愉快な思い

1) 大きな旅行カバンを持って旅をし続けるのは大変だから、ホテルで保管してもらおう、と私は考えていた。しかし、思った通りにはいかなかった。仕方なく駅の荷物預り所に持ってゆくことにした。Waterloo の駅まで運んで、どこに預けたらいいか The Carphone Warehouse という看板の店で聞いてみた。すると若者が「どこへ行くか」と聞く。その日はちょっと予定に迷いがあったので、すぐには行く場所の名前が出てこなかった。ガイドブックを見て答えようとしたが、私がどこへ行くかを彼に言う必要はない。荷物を預かってくれる所を教えてもらえばそれでいいのだ、ということ伝えた。そのとき、イギリスに来て初めて“I cannot understand your English.”と言われた。

その途端、彼に電話がかかってきた。待てよ。私の英語が分からない、と言われたのは初めてのこと。そんな馬鹿なことはない。私は重い荷物をここまで持ってきて、真剣に尋ねているのだ。これは嫌がらせだな、と思った。そこで、彼の電話が終わるまで待ってやれ、という気になって、しばらく立っていた。すると、彼の隣に座っていた男性が、あそこに行けばロッカーがある、と教えてくれた。私の英語がどんなに下手だったとしても、荷物を預けたいという意図はちゃんと伝わっていたのではないか。ひどい嫌がらせをするものだ。なんと荷物預かり所は、その店から10メートルと離れていない場所にあった。

2) もう一つの不親切は、イギリスを離れる直前のことである。大した金額ではなかったが、申

告すれば付加価値税<sup>4)</sup>が戻ってくるということなので、試しにやってみることにした。所定の用紙に指示通り記入して、スタンプを押してもらった。出国前に投函するように、という指示が書いてあったが、念のため係に確認してみた。すると、日本で投函せよと言う。おかしいことを言うものだと思って、現金で払い戻しをするカウンターで再確認をした。すると、あそこの臨時のポスト袋に入れなさい、ということであった。「あなたは親切だが、あそこの税関の彼女は不親切だ」と告げると、そこにいた男女の二人は、にこにこしながら彼女の不親切は私たちも知っている、と言うのだった。どこの国にも意地悪をする人はいるものだと分かったら、私はなぜかほっとするものを覚えた。帰国前に投函されると、彼女の仕事が増えるせいか、それともなるべく投函させない方針が取られているのか、と疑ってみたくなる態度であった。

## V. イギリスの発見

イギリスに来て、初めて発見したことがいくつもある。それはイギリスの発見であると同時に、自分の発見でもあった。最後にそのことを書いておこう。

### 1. 心静かに

1) Matthew Arnold の詩 'Dover Beach' が念頭にあって、私は Dover に一泊した。白亜の絶壁を海岸から眺め、そのあと坂道を登って Dover Castle まで行った。"The sea is calm tonight." で始まる冒頭の数行は、Dover の月夜の風景。詩の内容が二つに分離していると解説書にあったと思うが、こうして Dover Castle の高台に立ってみると、2,000年前の昔にこの原っぱで夜陰に紛れた戦闘があったことは、十分に想像できた。Arnold が詩の最後を

And we are here as on a darkling plain  
Swept with confused alarms of struggle  
and flight,  
Where ignorant armies clash by night.<sup>5)</sup>

(そしてわれらは今、戦闘開始・退却という合図が  
乱れ飛び、敵・味方の区別の分からぬ軍隊同志が、  
夜もすがらぶつかりあう薄暗がりの平原の上にいる  
ようなもの)の意)

と結んでいる意図が、実によく実感できた。

2) Westminster Abbey では行列に15分並んで、ようやく中に入ることができた。その荘厳さは今更私が言うまでもない。はじめて見る私にとって、それは大きな感動であった。しかし礼拝堂の見学を終わってから、裏手に当たる College Garden に足を踏み入れて、私はびっくりした。2匹の黒猫と老婆が、ベンチで静かにくつろいでいるだけで、ほとんど人がいない。高いフェンスの向こう側には Houses of Parliament が高くそびえている。道路には車が忙しく行き交っているはずである。しかしここは全くの静寂。London のどん真ん中にこんな静かな場所があるとは、全くの驚きであった。私はしばしの時間をこの静けさの中で過ごした。

3) 実は前の日 Westminster Abbey に入ろうと思っていたが、時間が遅すぎたので予定を変え Buckingham Palace まで歩くことにした。ところが行き過ぎたらしく、Westminster Cathoric の前に来ていた。折角だから、その教会の中に入ってみることにした。丁度17時30分からミサが始まるころだったので、それに参列した。最後になって "Peace Be with You!" と言い合って、近くにいた婦人二人と握手を交わした。儀式の一つに組み込まれているとはいえ、心温まる瞬間だった。

4) Canterbury 入りしたのは日本のお盆に当

たる8月15日である。ここは善光寺によく似た通りと霧田気を漂わせている門前町である。ホテルはその名も Cathedral Gate Hotel で、文字通り入り口の門の隣だった。1438年創業という古い建物で、床はあちこち傾斜していたが、風格のあるホテルだった。到着して、早速 Canterbury Cathedral を訪ねると、日曜日ということで入場は無料だった。一通り見物したあと、ここでも18時30分からのお祈りに参加させてもらった。司祭は旧約聖書の第1頁を開いて、

In the beginning God created the heaven and the earth...And God saw the light, that it was good: and God divided the light from the darkness....

と格調高く朗読し始めた。「神が天と地を創造し、光と闇を分けた」創世期の冒頭から第2日まで、朗読は続いた。礼拝堂に響き渡る厳かな英語に、私はしばし聴き惚れた。

そのあと4日前の日食に言及し、太陽を神だとすれば、その神からの光をさえぎった月は人間の罪に相当する、という意味のことを話された。もちろん自然科学的な現象は認めた上で話で、原罪を背負って生きる人間は完全ではないのだから、キリストを通して神の救いを求めよう、という趣旨の説教だったと思う。やがて司祭の後について参列者一同祈禱書を朗読し、賛美歌を歌った。最後に神への感謝を込めて、30分の儀式は終わった。

クリスチャンでない私は、十字架に向かって静かに頭を下げた。その瞬間、胸の内から熱いものがこみ上げて来て、思わず涙ぐんだ。こらえようとすると、体に震えを覚えた。こういう感動は今まで一度も味わったことのない種類のものだった。司祭と握手しながらいねいにお礼を述べて、その場を辞した。今回のイギリス旅行を集約したようなひと時に感激し、私はしばしペンチで瞑想にふけた。

## 2. London に戻って

London には夏の休暇でたくさんの旅行者が来ていた。8月初めは人、人、人であふれていたが、Bloomsbury 界隈で行き交う人々は、みんな目で挨拶をしてくれた。ところが、ヨーロッパへの玄関口となった Waterloo にホテルを移すと、挨拶しあう人の数は減ってきた。London の街はごみだらけで、地下鉄には新聞紙や週刊誌が散乱していた。掃除夫がいくら片付けても、とても追いつく様子ではなかった。旅人が鈍感なのか、それとも London 市民が鈍感なのか、とにかく汚かった。Buckingham Palace 前の広場が市民に開かれているのには感心したが、ここもごみだらけであった。車はスピードを出して走るし、救急車の音はひっきりなしに聞こえてきた。

ところがイギリスの田舎を回って London に戻って見ると、人の数もごみの数も少なくなっていた。車の動きも、どことなく忙しさを感じさせなくなっていた。地下鉄の床に木製の簧の子が敷かれている車両もあって、心が和んだ。夏の終わりが近づいて来たせいとか、私がイギリスに馴染んできたせいとか。きっとその両方だったろうと思う。

## 3. 鈴木 の 悩 み

日本人には鈴木姓が多い。そのため電話で予約しておいたホテルに別の鈴木さんが入っていて、ホテルを移動させられたことがある。もう一度は、私の予約カードに別の鈴木さんが署名していた。このときは幸い空室があったので、移動しなくてすんだ。三度目は Edinburgh でのことである。予約しておいた B&B に入ったら、すでに鈴木さんが来ているということで、ご主人はパニックになった。またかと思ったが、幸い奥さんがちゃんと私の部屋を準備してくれてあった。

鈴木 の ト ラ ブ ル が 三 度 も あ っ た の で、London のホテルで夕食の前に見かけた日本人男性に「鈴木さんですか」と話しかけてみた。答えは小林さ

んだった。それがきっかけで、小林さんと話すことになった。彼はNewcastleの日産工場で働いて2年になる人であった。

イギリスの道路は真っすぐでないこと。日本の道路は人力車のためだったが、こちらは馬車が基本だったということ。交差点には真ん中に車回しを取ってあるので、方向を間違えやすいこと。人に道を尋ねても、各人の思い込みで教えてくれるから、2人に聞かないと信用できないということ。基本的にイギリスは田舎だから、村や町の集落があって、平野と道路がその間をつないでいるということ。そんな話には私も同感した。

道路だけでなく、ローマ時代の遺産があちこちに残っていることやHenry VIIIの影響力の大きさ、Shakespeareの国際性等々、私の語りたことは多々あったが、省略した。別れ際に「失敗は楽しめばいいんだ」と言われ、私もそんなつもりで旅を続けてきてよかったと思った。イギリスにいるのも残り少なくなってきたころのことである。

#### 4. イギリスを離れる前に

イギリス訪問の目的の一つは、恩師Matthews先生に会うことであった。ただ、長い間ご無沙汰してしまったので、何をどう書いて事前に連絡を取ったらいいか、思案にくれた。そこで私は、ある日突然先生の家の前に立つことを心に決めた。Londonに着いた翌日Cambridgeに先生を訪ねた。私が恩師の家の前に立って、5分もしないうちに玄関のドアが開いた。なんとそこから最初に顔を見せて下さったのは、日本人の恩師鈴木善三先生であった。2人の恩師にここでお目にかかれるとは、まさに奇跡としか言いようがなかった。

2週間後に鈴木善三先生ご夫妻を訪ね、その後Matthews先生にもお会いしたが、それを最後とすることにした。話したいこと、聞きたいことはいっぱいあったが、日常を確認し、日常を大事にしたいと思ったからである。イギリスに到着して

以来、来るべき所へ来たという気持ちを抱いていた私は、長野に戻ってから、私の家のちょっと向こうに、LondonがありCambridgeがある、という意識が消えないでいる。一介の英語教師である私は、イギリスという教室にわが身を置きえた幸せを今しみじみとかみしめている。

おわりに

今回のイギリス旅行では、非常勤講師の中山アリ先生にお世話になった。お陰でMac & Tanya Purcellさんご夫妻とHarvey & Firdaus Webbさんのご家族ともお近づきになれたことは、何よりも幸せであった。英語専攻の卒業生安藤久美子さんには、Keats' Houseへ案内してもらった上、自宅で夕食まで御馳走になった。イギリスで活躍中の卒業生佐々木千香さんには、Londonで二番目に古いというpubに連れて行っていただいた。この次はお墓の上で昼食を取りましょう、と誘っていただいたが、実現しなくて何やらほっとしている。Matthews先生ご夫妻については、日本式の茶室が完成したら、またお訪ねする機会が来ることを願って、感謝の意に代えさせていただく。最後に、今回の旅行でお世話になったユニグロブKEIトラベルの芋川恵子さんにお礼を述べて、私の「コミュニケーション・アプローチの旅」を閉じることとする。

(注)

- 1) 福原麟太郎著作集2『ジョンソン大博士』研究社、昭和44年、参照。
- 2) 川崎寿彦『イギリス文学史入門』研究社、1986年、80頁。
- 3) 夏目漱石「倫敦塔」に「日本製の古き具足」の記述がある。新潮文庫、昭和53年版、18頁。
- 4) 個人旅行25『イギリス』昭文社、1999年、61頁。このガイドブックからは多くの助けを得た。
- 5) Kenneth Allott (ed.), *The Poems of Matthew Arnold*, Longmans, 1965年、243頁。